

平成26年度 学生による地域活性化プログラム
小千谷活性化プロジェクトチーム活動報告書

小千谷市中心市街地 活性化のための 若者による提言

平成26年度

07

ごあいさつ



学長 内藤 敏樹

継続は力なりと申しますが、今回で8年目を迎えた地域活性化プログラムにこの言葉があてはまるでしょうか。指導教員が入れ替わったりテーマが変わったりで、最初から同じテーマで続いている取組はそれほど多くはないのですが、学園祭などで8年間の成果を一覧できるようになっていたりするのを見るとちょっとした壮観です。昨年度から文科省の「地（知）の拠点整備事業（COC）」の一環としての位置づけがなされ再スタートしましたが、当初の意気込みが指導教員によみがえったのではないかと期待しています。

地域活性化プログラムは、学生が地域の中に入って行って地域の課題を解決していこうとするものですが、その実は地域による学生生活活性化プログラムでもあります。つまり我々教員が講義やゼミ各種の演習を通じて学生を教導するだけでなく、さまざまな形で地域の方々と接し、時に怒られ時には褒められるという体験を積むことによって学生が実社会に出た時の「コミュニケーション能力」を飛躍的に伸ばせる可能性が期待されているのです。

またプログラムはチームで共同作業を行うものなのですが、率直に言ってメンバー間にはいろいろと温度差があります。時間を守らない、割り当てられたタスクをちゃんとやっこない等さまざまなドタバタが起きていること、これも実社会の縮図であるかと思えます。こうした困難を乗り越えることを通じて成長していく学生が増えています。

これまでのプログラムの中で学生と地域の方々がいろいろな形で接触し、さまざまな活動を行ってまいりました。中には「若い学生さんが地域の中に入ってきてくれるだけで充分です」というご意見もありましたが、さらにプラスしてもっと地域のためになることをしなければならぬと考えています。

本学は開学以来、「去華就實」「社会に役立つ人間となれ」をモットーとしています。ただ役に立つかどうかを決めるのは社会であり他人です。ここで独りよがりがあったり、根拠のない独善があったりしたのでは真に「役立つ」人間にはなれません。つまり上のモットーは、自らに対する客観的な認識に裏付けられた自身が必要になってくるということです。いろいろな人たち—関係者から率直な評価をもらえることは、成長途上の学生にとって得難い機会であるかと思えます。あとはその評価をどう活用していくかということですが、この点はまだ学生次第ということになりますので、このあたりも我々は考えていかねばならない点であるかと思っています。

地域交流、実社会との連携を行っている教育機関は他に数多くあると思います。東日本大震災の後も、被災地の支援を正課の中で取り上げた大学があると報告されています。ただ、本学のような形で長期間地域との関係を築き上げているものはあまりないのではないかと自負しています。地域の方々、特に学生と接することになる各位にはご迷惑なことかも知れませんが、次世代の若者の成長のためによりしくお願いする次第であります。

平成27年3月

はじめに

—小千谷市中心市街地活性化のための若者による提言—



長岡大学教授／担当教員 鯉江 康正

本取組は、小千谷の中心市街地を中心にどのようにしたら活性化できるかを、学生目線で考えたものである。

近年、小千谷市本町通りは店舗の移転や閉店が相次ぎ、商店街はシャッターが多く見受けられ人の流れが少なくなっている。株式会社たかの会長の高野雅氏から「学生のアイデアで本町通りを中心に小千谷市の地域活性化ができないか」との依頼を受け、平成25年度にこのプロジェクトが発足した。

平成25年度は、まず住んでいる人から見た小千谷と、周りから見た小千谷では、どのような違いがあるのかといったアンケートを実施した。調査内容は、①回答者の属性（性別、年齢、居住地）、②参加したことのある催し、購入したり食べたりしたことのある名物、③訪問したことのある景勝、史跡、施設、である。その結果は、小千谷市民が参加したり食べたりしたことのあるものの代表は「おぢやまつり」「小千谷そば」であった。これに対して、長岡市民からみたそれは「片貝まつり四尺玉花火」「小千谷そば」であった。詳細については報告書をご覧ください。

平成26年度は、昨年度の活動を踏まえ小千谷活性化案を具体化し、下記の3つの提案を行った。第1の提案は、就学前児童を対象とした総合施設の提案である。これは、長岡市にある「ちびっこ広場」や「ぐんぐん」「てくてく」「すくすく」などの施設を参考にした小千谷の「わんパーク」の総合施設化である。

第2の提案は、本町通りを利用したイベントの提案である。具体的には、そばと本町通りの坂道を利用した「流しそば」や雪と坂道を利用した「そり大会」である。

第3の提案は、空き店舗、空き施設を利用した地域活性化案の提案である。この提案では、本町通りに限定せず、広く小千谷市で活用できるのではないかと提案している。具体的には、十日町市川西地区にある直売所「じろばた」を参考にした「地域密着型複合施設」、「パブリックビューイング等の簡易イベント施設」、スラックライン、トライフットボール、パンポンなどの「ニュースポーツの場の提供」である。

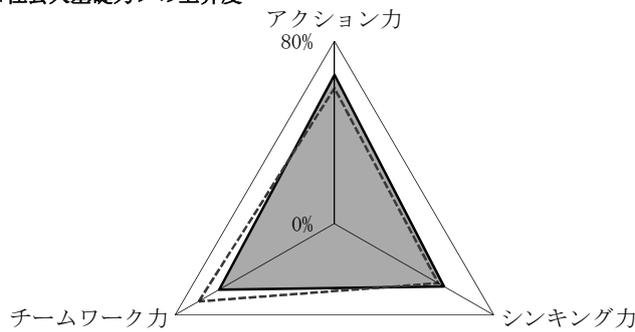
本調査を実施するにあたって、実現可能性は考えないで、学生がよいと思うものを提案しなさいと指示をしたため、その実現が難しいものもありそうである。例えば、坂道でのそり大会などは、雪を道に戻さなければならないなどの問題もある。また、駐車場の問題、地権者との調整の問題など後ろ向きに考えれば暗い気持ちになる。本取組では、それらを無視して、希望が持てるように、学生たちが各活性化策がどのような効果をもたらすかを考え提案したもので、前向きで楽しいものになっている。ぜひ、一読いただきたい。

平成27年3月

平成 26 年度 学生による地域活性化プログラム 社会人基礎力の上昇度

地域活性化プログラムにおける学生教育の目標は、社会人基礎力の向上、ビジネス展開能力の向上、専門的スキルの向上が目的である。平成 26 年度学生による地域活性化プログラムに参加した 10 取組の学生の「社会人基礎力」の伸び具合について、学生とゼミ担当教員にアンケートを実施した。アンケートは取組に参加した学生一人一人を対象に、社会人基礎力の変化を評価する形で実施した。学生は自己評価（有効回収 69）であり、教員は各ゼミ生についての評価である。

<社会人基礎力>の上昇度



★「社会人基礎力」

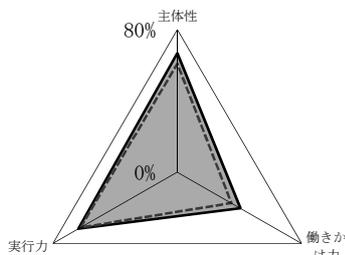
＝「アクションカ」「シンキングカ」「チームワークカ」が上昇

3つの社会人基礎力の上昇度（取組前と取組後の比較）は、学生の自己評価と教員評価の間にずれがある。今後の取組においては、今年度の結果に現れている学生評価と教員評価の差を小さくすると同時に全体的な上昇度を高めていくことに対して、継続的に検討していく必要がある。

※図の網かけ ■ は学生評価、点線 □ は教員評価である。

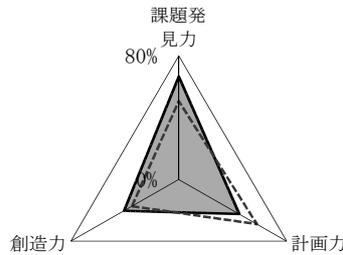
	学生評価	教員評価
アクションカ	65.2%	59.4%
シンキングカ	55.1%	52.2%
チームワークカ	58.0%	68.1%

<アクションカ>の評価



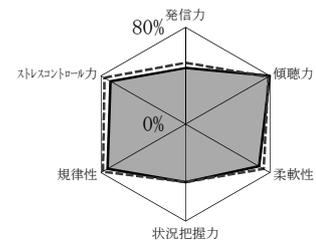
	学生評価	教員評価
主体性	66.7%	60.9%
働きかけ力	40.6%	34.8%
実行力	63.8%	62.3%

<シンキングカ>の評価



	学生評価	教員評価
課題発見力	66.7%	50.7%
計画力	44.9%	58.0%
創造力	40.6%	34.8%

<チームワークカ>の評価



	学生評価	教員評価
発信力	46.4%	50.7%
傾聴力	79.7%	78.3%
柔軟性	69.6%	73.9%
状況把握力	47.8%	47.8%
規律性	73.9%	78.3%
ストレスコントロール力	71.0%	76.8%

<アクションカ>

アクションカの3つの指標を比較すると、今年度の学生の場合、主体的には取り組めたと思っている学生の割合は高いが、教員の評価は低くなっている。学生はそれなりに積極的に活動していると感じている一方で、教員はもう一歩踏み出してほしいという期待感を持っているようである。

<シンキングカ>

学生の自己評価では、課題は見つけれられたが、自分で計画して課題に立ち向かい、課題解決ができた学生は残念ながら少なく、また創造力が低くなっている。同様に、教員評価でも創造力については厳しいものになっている。シンキング力が弱い傾向があり、この点をどのようにして伸ばしていくかが課題として残った形である。

<チームワークカ>

チームワーク力は、「アクションカ」や「シンキングカ」よりも学生評価と教員評価の類似性が高い。

学生の自己評価も同様であるが、教員の評価が発信力と状況把握力が低い点は、今後指導を強めていく必要がある。



平成26年度 学生による地域活性化プログラム 小千谷市中心市街地活性化のための 若者による提言

- 担当教員
鯉江康正
- ゼミ学生
4年生：小幡陽生、石井恵夢 3年生：高橋良樹、廣川友香 2年生：新保祐樺、中原紗貴美
- アドバイザー：
樋熊捷平 氏（株式会社たかの）
安達一啓 氏（長岡市市民協働推進室市民協働班 主査）

取り組みの背景

近年、小千谷市本町通りは店舗の移転や閉店が相次ぎ、商店街はシャッターが多く見受けられ人の流れが少なくなっている。

株式会社たかの会長の高野雅氏から「学生のアイデアで本町通りを中心に小千谷市の地域活性化ができるのか」との依頼を受け、平成25年度にこのプロジェクトが発足した。

活動の枠組みと方法

- 平成25年度は、まず住んでいる人から見た小千谷と、周りから見た小千谷では、どのような違いがあるのかといったアンケートを実施した。

アンケートの目的

小千谷市民および小千谷市以外に住んでいる人から見た小千谷市の魅力を調査することにより、今後の小千谷市の魅力発信に役立てる。

調査内容

- 1、回答者の属性（性別、年齢、居住地）
- 2、参加したことのある催し、購入したり食べたことのある名物
- 3、訪問したことのある景勝、史跡、施設

調査結果のポイント

小千谷市民が参加したり食べたことのあるものの代表は「おぢやまつり」「小千谷そば」であった。これに対して、長岡市民からみたそれは「片貝まつり四尺玉花火」「小千谷そば」であった。



- 平成26年度は、昨年度の活動を踏まえ小千谷活性化案を具体化し、下記の3つの提案を行った。

1. 就学前児童を対象とした総合施設の提案
（「わんパーク」の機能強化）
2. 本町通りを利用したイベントの提案
（そばと坂道を利用した「流しそば」や雪と坂道を利用した「そり大会」）
3. 空き店舗、空き施設を利用した地域活性化案の提案
（「地域密着型複合施設」、「パブリックビューイング等の施設」、「ニュースポーツの場の提供」）



（成果発表会の様子）

2年間の取り組みを通して

ゼミナール活動とは違い不定期での活動だったため時間が足りなく、中途半端になってしまった点、情報収集不足だった点が多かった。もともとメンバーの大部分が小千谷市についての知識が無いなか、2年間小千谷市について活動して多くのことや魅力を知ることができた。多くの観光地やスポットが小千谷市にはあるので、そういったものとリンクして活性化につながればいいと感じる。

平成26年度 学生による地域活性化プログラム

小千谷中心市街地活性化の ための若者による提言

小千谷活性化プロジェクトチーム
(担当教員：鯉江康正)

4年生

11E008 小幡陽生

11E002 石井恵夢

3年生

12E026 廣川友香

12E017 高橋良樹

2年生

13E020 中原紗貴美

13E015 新保祐樺

目 次

1. はじめに（取組の背景）	
2. 平成 25 年度の活動	
2.1 現状報告と打ち合わせ	1
2.2 アンケートの設置とアンケート内容	2
2.3 アンケート結果	5
2.4 アンケートのまとめ	12
2.5 今後に向けて	12
2.6 成果発表会	12
2.7 平成 25 年度の活動を振り返って	13
3. 平成 26 年度の活動	
3.1 小千谷の現状確認	14
3.2 小千谷活性化案の話し合い	14
3.3 各活性化案の具体化	14
3.4 就学前児童を対象とした総合施設の提案	14
3.5 本町通りを利用したイベントの提案について	15
3.6 空き店舗空きスペースを利用した活性化の提案	16
3.7 成果発表会	20
3.8 平成 26 年度の活動を振り返って	21

1. はじめに（取組の背景）

近年、小千谷市本町通りは、店舗の移転や閉店が相次いでいる。商店街はシャッターが多く見受けられ、人の流れが少なくなってしまった。そこで学生のアイデアで、本町通りを中心に、小千谷市の地域活性化ができないかという株式会社たかの会長の高野雅氏からの依頼で、平成 25 年度にこのプロジェクトが発足した。活動はゼミナール活動とは異なり、不定期で集まりプロジェクトを進めてきた。今回の報告書では平成 25 年度の活動と平成 26 年度の活動の 2 年分を記載する。

2. 平成 25 年度の活動

2.1 現状把握と打ち合わせ

平成 25 年度は、高野氏を含め小千谷市の方たちとの打ち合わせからスタートした。第 1 回の打ち合わせでは 3 人の学生（小幡・廣川・高橋）が参加した。内容は企画書の確認や、小千谷市の人口、産業の現状の説明を受けた。小千谷市の方たちは、若者の発想力、提案がほしいといった要望であった。その中で、まずは住んでいる人から見た小千谷と、周りから見た小千谷では、どのような違いがあるのかといったアンケートを実施することになった。



〈打ち合わせの様子〉



〈打ち合わせの様子〉

2 回目の打ち合わせまでに、どのようなアンケートにするか、質問項目などアンケートの原案を学校にて考えた。学生 4 人（小幡、石井、廣川、高橋）から上がった意見などをまとめ、2 回目の打ち合わせにてアンケートの原案を提示し、質問の内容の説明などを行った。その結果アンケート内容は確定したが、実施時期や実施場所を少し検討することとなった。2 回目の打ち合わせでは、アンケートのことだけではなく、小千谷そばの現状についても教えていただいた。

2 回の打ち合わせ前に小千谷の中心市街地の現状はどのようなものなのかを実際にメンバーで歩いてみた。平日の昼でありながら、シャッターが閉まっている店が数多く目についた。中心市街地の中に小千谷総合病院があるため、人通りは多少あり、周りには薬局が何店かあった。しかし、小千谷総合病院は移転が計画されている。移転後はもっと人通りが少なくなることが予想される。それに加えて、薬局も同時に移転する可能性が考えられ

る。その結果、現在よりもシャッター街が進んでしまうのではないだろうか。シャッター街の増加によって、また人が減る、店が減るといった負の循環になってしまうことが心配される。



平日の中心市街地の様子



真ん中の建物が小千谷総合病院
郊外への移転が決定している。

2.2 アンケートの設置とアンケート内容

過去2回の打ち合わせから、まずは小千谷市のイメージに関するアンケート調査を行なうことになった。アンケートは学生4人（小幡、石井、廣川、高橋）が中心に原案を考え、打ち合わせ時に高野氏に確認してもらい、改良を加え作成した。

☆ アンケートの目的…小千谷市民および小千谷市以外に住んでいる人から見た小千谷市の魅力を調査することにより、今後の小千谷市の魅力発信に役立てる。

☆ 調査内容

- 1、回答者の属性（性別、年齢、居住地）
- 2、参加したことのある催し、購入したり、食べたりしたことがある名物
- 3、訪問したことがある景勝、史跡、施設

上記の3つが主な調査内容である。



〈スーパー高野〉



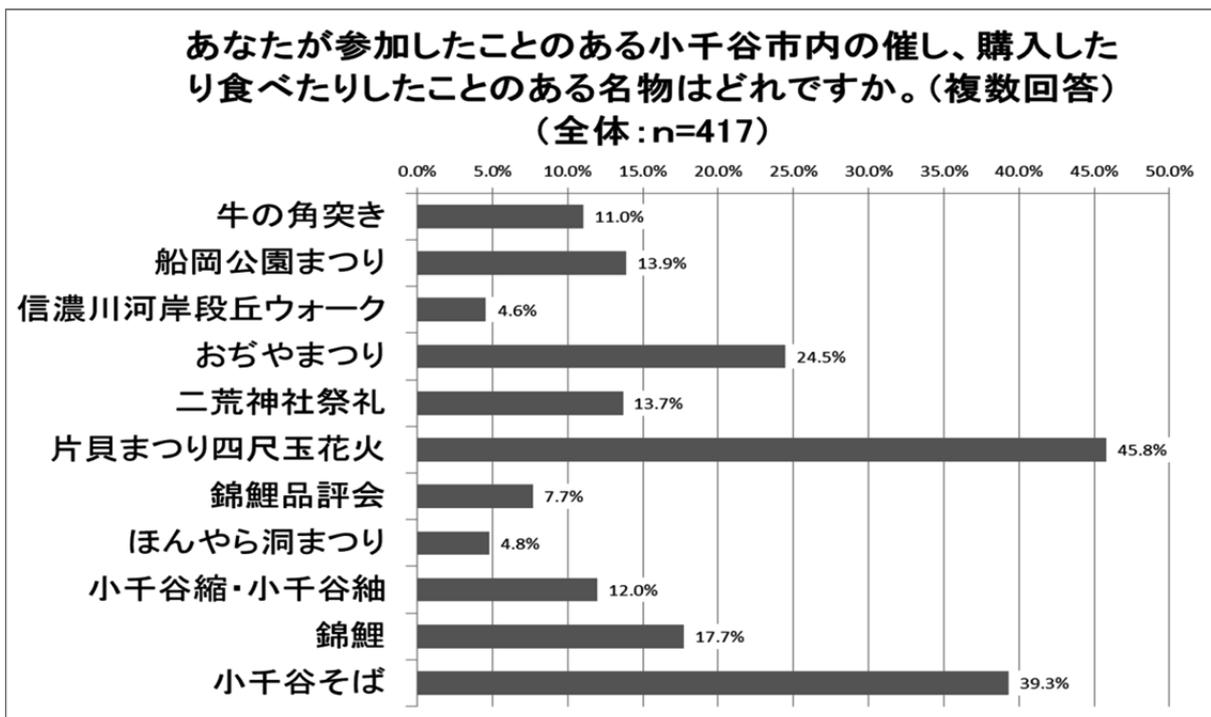
〈錦鯉の里〉

また、小千谷市以外の人々のイメージを得るために、長岡、見附市内のまちの駅の駅長さんにご協力いただき、駅長さんにアンケートに答えてもらった。さらに、長岡大学学生にアンケートを行ない、若年層が小千谷市にどのようなイメージをもっているかを調査した。

2.3 アンケート結果

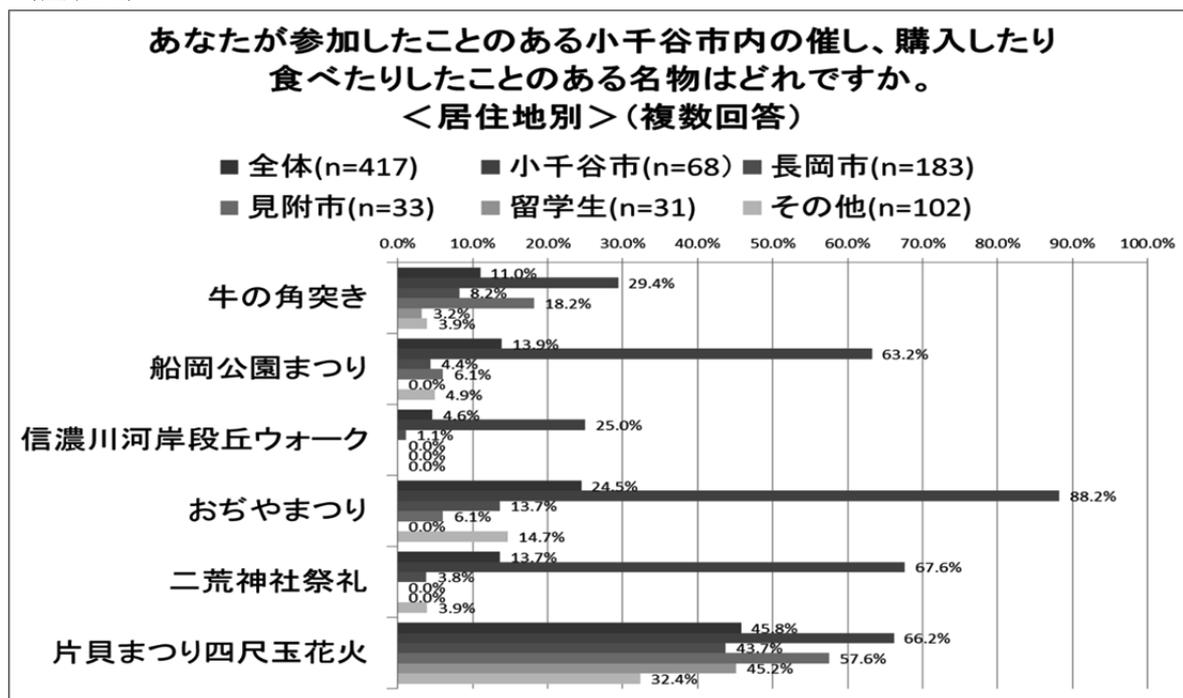
アンケートの回収票は、小千谷市施設はプラザ片山が 14 票、クレープハウス星野屋が 35 票、たかのスーパーが 38 票、錦鯉の里が 8 票の 95 票であった。長岡・見附市内のまちの駅の駅長さんが 69 票。長岡大学生が 253 票と全体で 417 票になった。この際注意しなくてはならないことは、調査場所によって属性が異なっているため、全体の数値は回収数に影響を受けている可能性が高いことである。全体では、長岡大学学生の回収数が圧倒的に多いため、長岡大学学生のアンケート結果が結果にそのまま反映されやすい。そのため、アンケート集計は居住地別にも行った。

〈図表 1〉

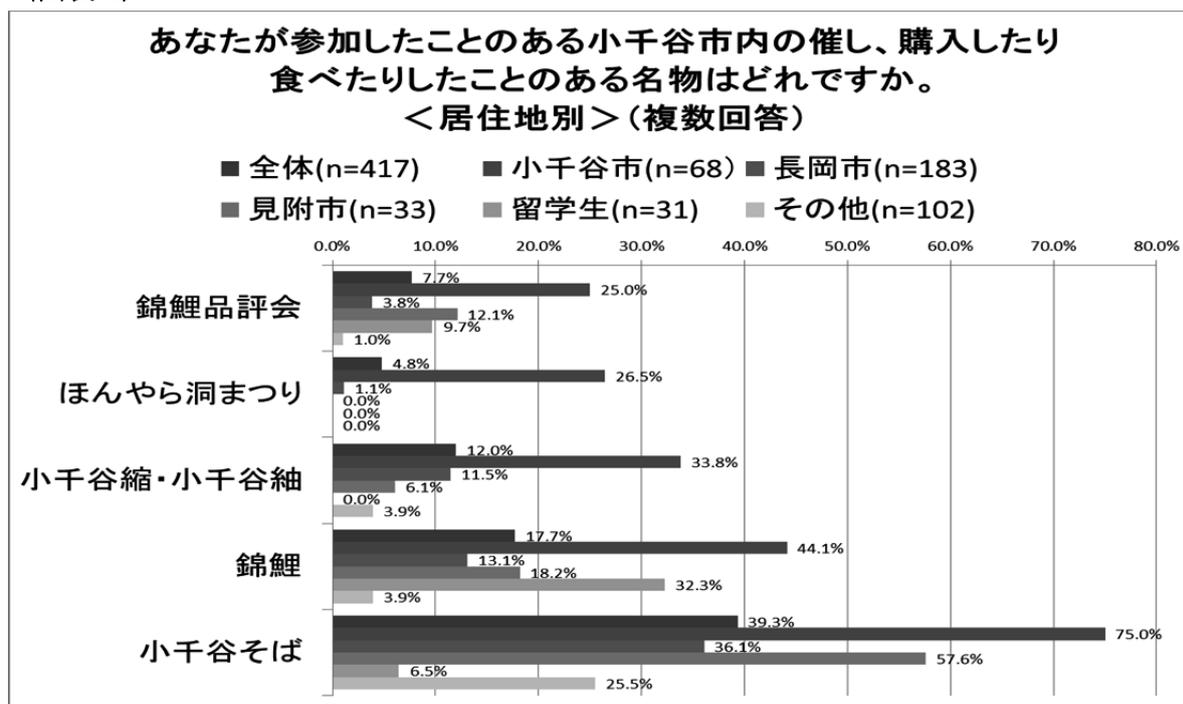


図表 1 は参加したことがある小千谷市の催しまたは名物についてである。アンケートの結果、片貝まつり 4 尺玉花火の参加率が 1 番高く、全体で 45.8%と半数近い人が参加したことがあるという結果になった。4 尺玉花火に次ぐのが、小千谷そばについてである。小千谷そばを購入または食べたことがあるというのが 39.3%と高い数値であった。その他の催しは、おぢやまつりが 24.5%と全体の中では高い数値であったが、その他の催しは 10%台から 1 ケタと参加率は高くなかった。

〈図表 2〉

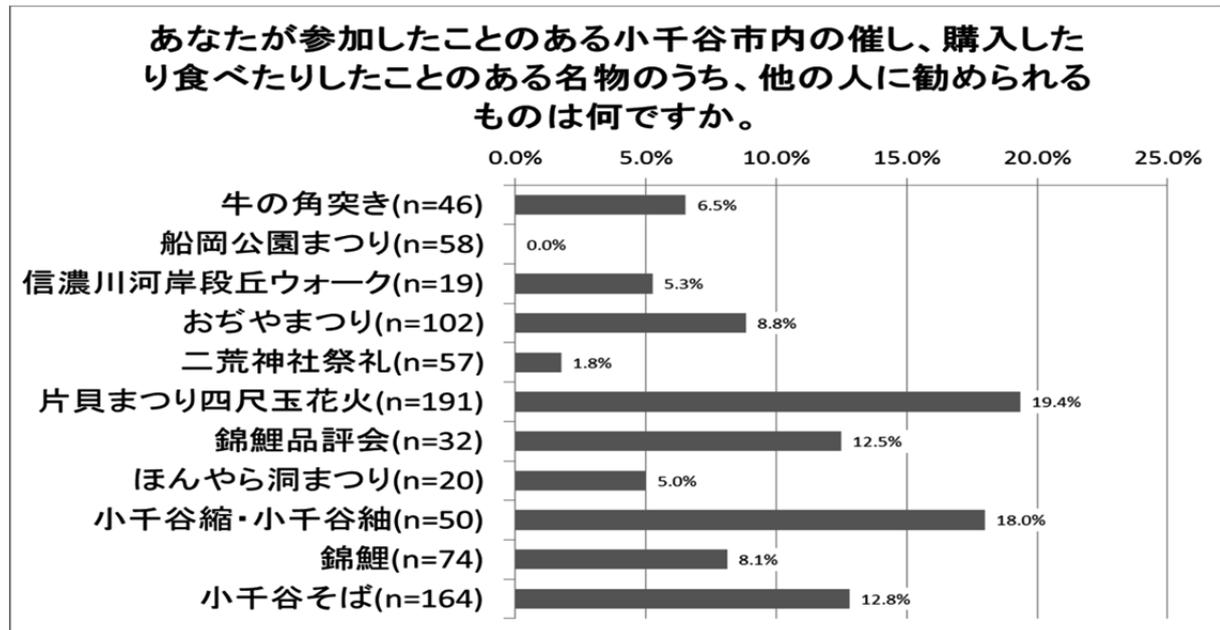


〈図表 3〉



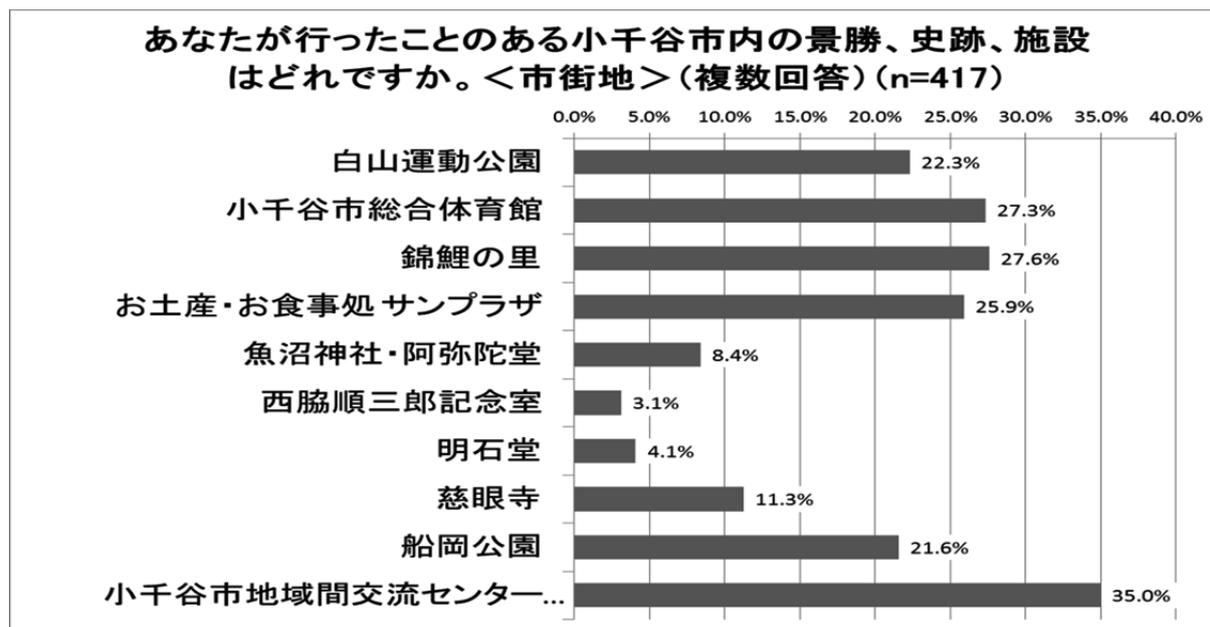
図表 2、図表 3 は図表 1 のアンケート内容を居住地別に表したものである。全体的に小千谷市在住の方は、どの値も高い値となっている。図表 1 では四尺玉花火が 1 番高い値となっていたが、小千谷市在住の方だけを見ると、おぢやまつりが 1 番高い値（88.2%）となっている。この結果、4 尺玉花火は他地域からの参加が多いということがわかる。それに比べておぢやまつりは、全体では 24.5%と、他地域からの参加が少ないことがわかる。

〈図表 4〉



図表 4 は参加したことがあるイベントや、購入品のうち、他の人におすすめできるものである。イベントに参加したことがある人数や購入したことがある人数はバラバラなので、イベントによっては、1 人の意見で結果が大きく左右されるので注意していただきたい。その中で、1 番数値が高かったのは、四尺玉花火である。参加したことがある 2 割近い人が、おすすめできるとしている。それに次ぐのは、小千谷縮・小千谷紬である。18%の人がおすすめしている。3 番目は小千谷そばと、代表的な名物が続いていく。逆におぢやまつりは、参加したことがある人数は多かったのだが、おすすめ率はあまり伸びなかった。

〈図表 5〉



図表 5 は、訪れたことのある小千谷市内の景勝、史跡、施設の市街地編である。この中で 1 番数値高かったのは小千谷市地域間交流センターである。これは湯どころちぢみの里のことである。ここは大浴場や、露天風呂がある施設であるため、利用したことがある人が多いという結果になった。小千谷市地域間交流センターに次ぐ、高い数値だったのは錦鯉の里である。ここは、多くの美しい鯉をととても間近で見ることができる施設である。錦鯉の里に僅差で次ぐのが、小千谷市総合体育館である。体育館ということで 1 度は行ったことのある人が多かったのではないかな。



〈小千谷市地域交流センター〉

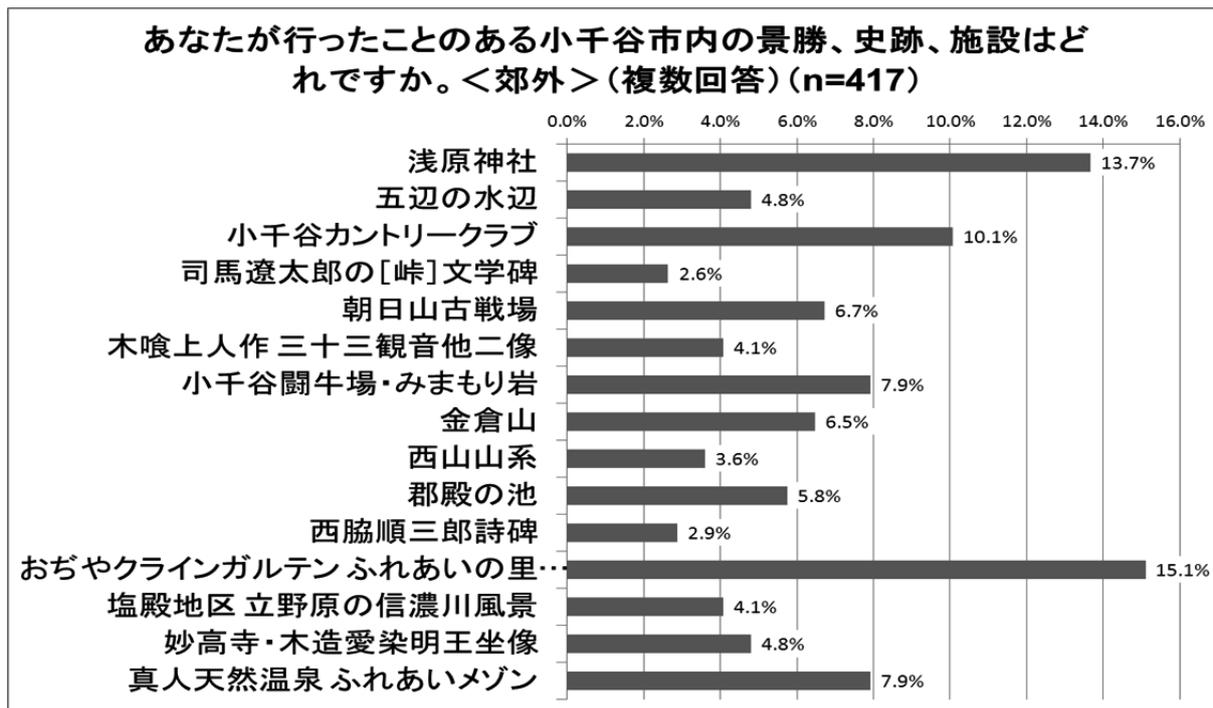
※出典にいがた観光ナビ



〈錦鯉の里〉

※出典小千谷総合産業会館サンプラザ

〈図表 6〉



図表 6 は訪れたことのある景勝、史跡、施設の郊外編である。郊外ということもあり、図 5 で示した市街地にある施設よりも、訪れたことのある人の割合が少なかった。

この中で最も高かったのが、おぢやクラインガルテン ふれあいの里である。この施設は、正式名称よりも、山本山高原としてなじみが深いのではないだろうか。山本山高原では、ラウベと呼ばれる宿泊施設付きの農園があり、滞在しながら田舎暮らしを満喫できたり、日帰りで農業を体験できたりする施設である。その他にも、バラが楽しめる庭園や芝生公園などがある施設である。

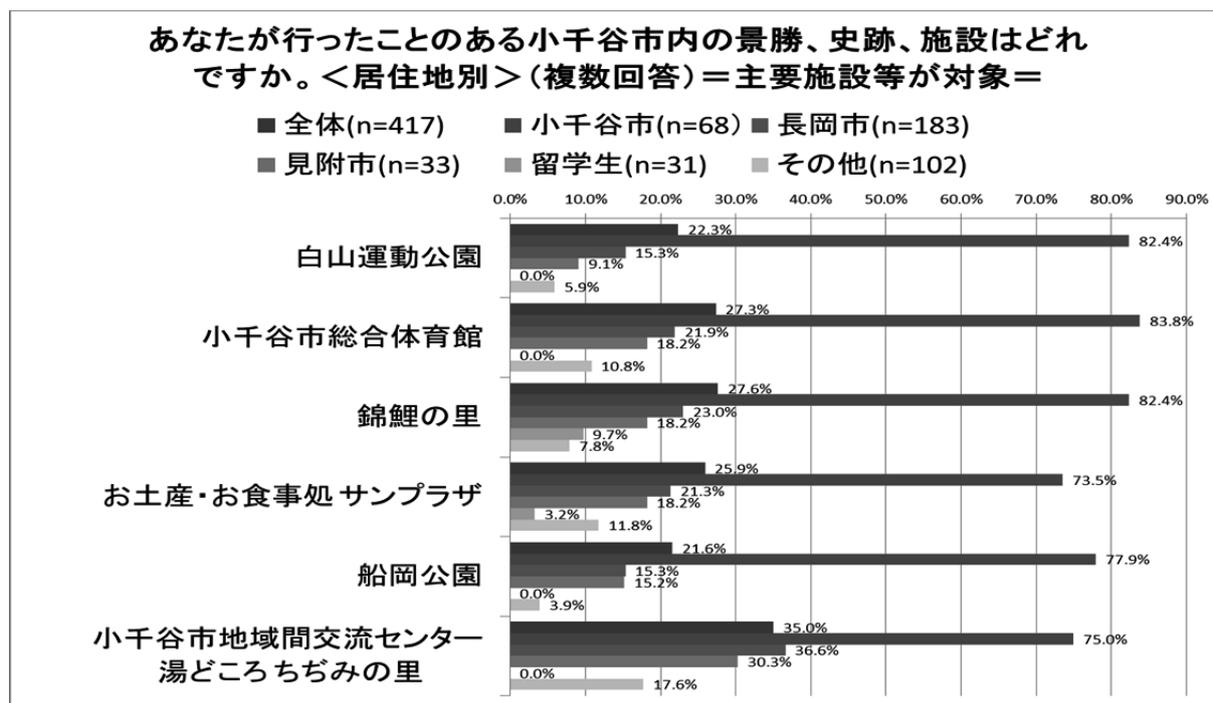


〈おぢやクラインガルテンふれあいの里〉

※出典小千谷市ホームページ

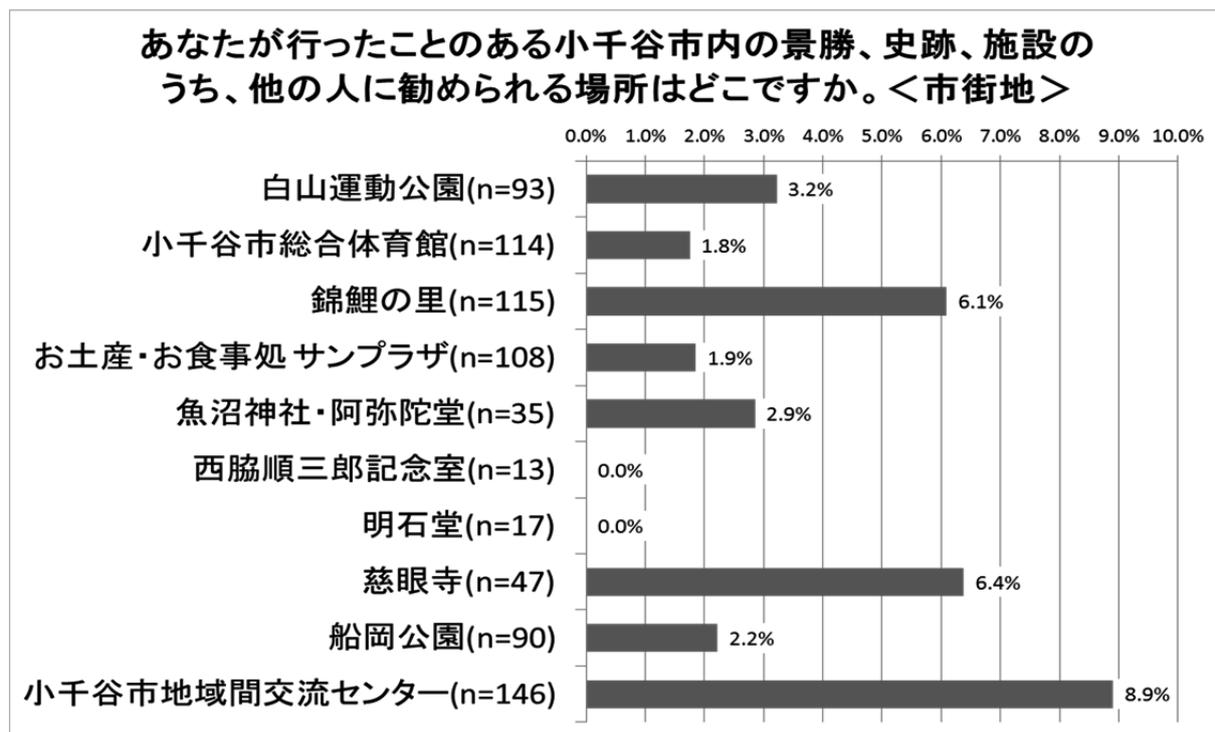
おぢやクラインガルテンふれあいの里に次ぐのは、浅原神社である。浅原神社は、片貝まつりで、花火の玉が奉納される有名な神社である。それに次ぐのは、小千谷カントリークラブである。ここは、ゴルフ施設なので訪れた人が多かった。

〈図表 7〉



図表 7 は、訪れたことがある施設を居住地別に表したものである。上記の表は主要施設のデータであるので注意していただきたい。結果としては、やはり小千谷市民の利用が圧倒的に高くなっている。すべての施設において、7割以上の方が利用したことがあるという結果になっている。そのため、小千谷市民にとって重要な施設であると言えるのではないか。中でも小千谷市総合体育館は、8割以上の方が利用したことがあると回答しており、身近な施設といえる。一方、小千谷市以外の方が訪れたことがある人が多い施設は、小千谷市地域間交流センター・湯どころちぢみの里である。これは、温泉施設であるので、小千谷市以外の人でも利用したことがある人が多かったのではないか。全体の数値を見ると、小千谷市地域間交流センター・湯どころちぢみの里が一番高い数値であったが、小千谷市民のアンケートだけを見ると、75%と他の施設よりも低い。この結果、全体の数値が伸びたのは、小千谷市民以外の人たちが訪れた結果であるということが出来る。

〈図表 8〉



図表 8 は訪れたことがある小千谷市街地の景勝地や施設のうち、おすすめできる場所である。この結果はサンプル値が少ないため、あくまで参考として見ていただきたい。その中で、小千谷市地域間交流センター・湯どころちぢみの里が 1 番高い結果となっている。それに次ぐのが錦鯉の里であり、訪れたことが多い場所は、その分おすすめしている人も多いという結果となった。おすすめ率が低い施設も、魅力がないわけではない。今回は、長岡大学学生の結果が数的に多く反映されてしまうため、おすすめのジャンルなどが偏ってしまう傾向があると考えられる。結果が 1.9%であった、お土産お食事処サンプラザは、小千谷そばなどをはじめとする、小千谷市の名物などから、和食やラーメンなどを食べることができる施設である。その場所や場所でいろいろな歴史や、文化、食事を楽しむことができるのである。



サンプラザで
食べることができる小千谷そば
※出典小千谷市産業会館サンプラザ



〈白山運動公園〉
※出典小千谷市ホームページ

2.4 アンケートのまとめ

アンケートの結果、小千谷市の観光地への訪問回数の有無や、どのような地域からお客さんが来ているかが分かった。しかし、長岡大学学生のアンケート数が、他の地域に比べて圧倒的に多くなってしまったため、各アンケート項目とも少々偏った数値になってしまったのではないか。その中で今後アンケートを取る際は、もっと各地域とも多くの数を集め、偏りを無くすことが今後に向けての課題である。

今回のアンケートで分かったこともある。それは、地元小千谷市民でも、施設などの利用率などが100%ではないということである。8割強の人たちは利用したことがあるという意見が多かったが、どの施設とも100%には届かなかった。年齢などで使う施設は変わってくるので利用率100%は難しいことだとは思いますが、素晴らしい施設があるのに、利用したことがないという人がいるのが残念なことだ。近隣の市民にも良さを発信し、利用の拡大をしていくことで、小千谷市の魅力の拡大や、利用者の拡大につながるのではないか。

2.5 今後に向けて

平成25年度の活動は、メンバーの4人中3人が小千谷市について知識がなかったため、小千谷市を知ることから始まった。現状を知り、アンケートを行うことでより多くの情報を得ることができた。しかし、そこからの発展を考える時間が不足していたため、26年度に活性化案を提案する形になった。そこで私たちが、来年度に向けて提案していくことは、小千谷総合病院の跡地の利用方法である。報告書の冒頭で小千谷総合病院について述べたが、移転後はさらに本町通りが衰退していってしまうのではないかという懸念がある。移転は決定していることなので、その跡地の利用方法を考えていきたい。

もう一点は、本町通りで何かイベントを開催することができないかということである。本町通りには、現在空き店舗が多いため、その空き店舗を利用できないか考えていきたい。例としてはフリーマーケットや、バザールなどである。

2.6 成果発表会

平成25年度の成果発表会が、長岡市で12月14日に開催された。そこでは、上記に記載したアンケートのまとめを発表した。発表したのはアンケートだけではない。小千谷市の魅力の発信ということで、パワーポイントを用いて観光スポットや名物などについて簡単に説明させていただいた。そして最後には、26年度に向けての提言を行った。移転予定となっている小千谷総合病院の跡地の利用や本町通りでのイベントを提言した。発表後は株式会社たかの、元常務の樋熊捷平氏から感想をいただいた。その中でアンケートなどを用いて、よく調べてもらったという評価と、来年度も頑張ってもらいたいといったねぎらいの言葉をいただいた。

< 発表資料の例：一部抜粋 >

(2) 小千谷市の名物

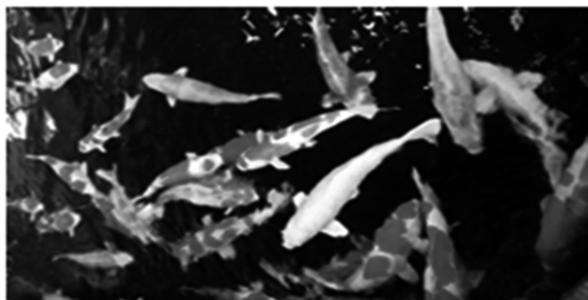
① 小千谷縮・小千谷紬



古来よりの麻織物を江戸期に改良し誕生した小千谷縮は通気性、吸水性に優れ爽やかな着心地。

出典: 技と美 日本の絹展

② 錦鯉



出典: 小千谷市ホームページ

錦鯉といえば小千谷というほど(県内の約45%を生産)その名は全国的に知られ、国内はもちろん海外においても高い評価を得ています。

2.7 平成 25 年度の活動を振り返って

もともと2年計画で始まったプロジェクトであるため、25年度の活動は、提案ということよりも、まずは小千谷市を知るところから始まった。何回も小千谷市に足を運び、自分自身が見たり、体験したりすることで魅力を発見することができた。実際に訪れることで、より多くの魅力や発見があったため、いろいろな人に訪れてほしいと思う施設も多くあった。多くの人に来てもらったり、良さを知ってもらったりするためには、PRなどの告知や、インパクトが重要なのではないか。多くの人に訪れてもらい、活性化を図るために、26年度も活動していき、1つの案としてしっかりと提案していけたらと考えている。

3. 平成 26 年度の活動

3.1 小千谷の現状確認

平成 26 年度から新たに 2 年の中原紗貴美と新保祐樺がプロジェクトに加わった。前年度の活動から時間が経ってしまったため、昨年度の活動を振り返りつつ、小千谷の現状確認から始まった。小千谷の市街地を歩き、改めて現状を認識した。感想としては、平日の昼でありながら、多くの店のシャッターが閉まっていること、せっかくお店があっても駐車場がないことなどが挙げられた。昨年度も同様の課題があるとプロジェクトチームで挙げられていた。

3.2 小千谷活性化案の話し合い

昨年度の活動と、小千谷の調査を踏まえ、活性化案をメンバーで話し合った。平成 25 年度のアンケートをみると、他地域の人に来るイベントが少ないことが分かった。そのため、インパクトのあるイベントの開催がいいのではないかという意見や、既存施設や、空き施設を使って、地域活性化を行なうべきではないかなど、様々な意見があった。例としては、パブリックビューイングの案や、本町通りを使ったそり大会など斬新な意見もあった。

3.3 各活性化案の具体化

メンバーで話し合った意見をより具体化するために、出された提案を、インターネットなどを使いながら調べる作業を行った。具体化していく案は 3 つある。

1. 就学前児童を対象とした総合施設の提案
2. 本町通りを利用したイベントの提案
3. 空き店舗、空き施設を利用した地域活性化案の提案

この 3 つを提案していくために情報を収集活動を行った。

3.4 就学前児童を対象とした総合施設の提案

小千谷市には、本町通りに子育て支援センター「わんパーク」がある。これは、子供たちが遊べるスペースがある施設である。活性化を図るためにも、この施設のサービス拡大を提案したい。

ここには、子供が遊ぶスペースはあるが、子供を連れてきた親御さんの休憩スペースがない。そのため、子どものスペースの拡大も重要なことではあるが、親御さんの休憩できる場、交流できる場があるといいのではないか。周辺には交流できる場がない。カフェ化するわけではないが、ちょっとした休憩スペースを設けてもいいのではないか。その結果地域の人が集まる場として、認知されるようになれば地域の活性化につながるのではないか。「わんパーク」の活用は子供だけが対象ではない。施設だけでなく、ソフト面での充実も図っていくことが重要なのではないか。

長岡市には、「子育ての駅」があり、街中に「ちびっこ広場」、他に「ぐんぐん」「てくてく」「すくすく」などの施設がある。

そこには子どもが遊ぶスペースはもちろん、

わんパークの様子

親御さんたちが交流できるスペースも設けられている。それだけではなく、手作りの広報誌を作成し、知名度をアップしている。「ちびっこ広場」にヒアリングに伺ったが、ここは午前9時から午後6時まで開館していて、まちなか保育園として一時保育もお願いできる。(休館日は年末年始)



出典

<http://www.city.ojiya.niigata.jp/site/wanpark/wanpark-annai.html>

「ちびっこ広場」には「わんパーク」が参考にできるアイデアがたくさん埋まっていそうだ。ここをモデルに考えてはどうか。

就学前児童の施設ではあるが、そこから親御さんの交流の場、そして地域の交流の場となれば、直積的に人口が増えるわけではないが、地域の活性化になるのではないかと思う。

3.5 本町通りを利用したイベントの提案について

2つ目に提案したいのは本町通りを利用したイベントの提案である。近年は平日の昼でもシャッターが閉まっている店が多い。郊外に大規模店舗ができたため、本町通りの店がどんどん少なくなってしまう。そこで本町通りでイベントを行ない、活気ある姿を1日でも取り戻すことで今後の良い影響があるのではないか。

ここでポイントとなってくるのは、雪を利用できないかということと、本町通り前の長い坂道を利用できないかの2点だ。この2点を踏まえ案を考えた。

1つ目は、1日限りの雪まつりだ。小千谷の雪を利用して本町通りで雪まつりを行なおうといった案である。すでに行われている地域もあるが、本格的な雪合戦を行ったり、長い坂を利用したそり大会を行ったりするのも面白いのではないか。安全面や、交通面を考えると、今すぐ開催は難しいが、あの坂を使ったそり大会は魅力的なのではないか。

2つ目は坂を利用した流しそばである。小千谷の名物であるそばを利用したイベントの提案である。名物と、特有の地形を組み合わせることで小千谷の特徴を生かしたイベントを開催できるのではないか。

そのイベント目当てで遠方からもお客さんが来るようになれば、地域にお金も落ちるので2つの効果を得つつ、小千谷をアピールすることができるのではないか。



〈名物と地形の融合〉

3.6 空き店舗空きスペースを利用した活性化の提案

次に提案するのは、空き店舗や空きスペースを利用した地域活性化だ。本町通りにはシャッターが閉まっている店舗が多く存在する。しかし今回は、本町通りに限らずに小千谷市で活用できるのではないかと考えたものを提案していく。

1つ目は、地域密着型施設の設置である。これには2つのポイントがある。1つ目は、地域の人々が集える場であること。2つ目は、雇用を生み出せる場であることである。これを考えると、道の駅ないし、まちの駅のような施設が好ましいのではないかと考えた。

そう考えたときにモデルとなってくるのは十日町市川西にある直売所「じろばた」である。そこは、地元の元気なお母さんたちによる食事処があり、地元のそば、手作りコロッケ、そばいなりやなどに加え、季節のメニューも取り揃えている。また、地元の新鮮な食材や生花、手作り雑貨なども販売している。このように地元の食材や、特産物を提供することに特化している施設である。このような施設があることで、雇用も生まれた。実際に「じろばた」はにぎわっているため、模範的なモデルになるのではないかと考えた。それだけでなく、雰囲気柔らかくあたたかく、とてもくつろぎやすいレイアウトになっている点なども参考にした理由である。小千谷市でこのような事業を始める場合、まずは現在、シャッターが閉まっている店や、店舗のひと区画など、規模は小さくなく小規模から始めていってもいいのではないかと考えた。ターゲットはおじいちゃんや、おばあちゃんや、地産地消を目的とした施設として提案させていただきたい。



直売所 じろばた

※出典 <http://www.ja-tokamachi.or.jp/jirobata/>



〈店内の様子〉



〈直販の様子〉

※出典 <http://www.ja-tokamachi.or.jp/jirobata/>

2つ目は、簡易イベント施設の設置である。簡易イベント施設の導入による目的は、多くの人が集まる場所の提供、みんなで楽しみを共有できる場の提供、気軽に来場できる場所の提供の3つである。具体例を挙げると、パブリックビューイングなどである。パブリックビューイングとは大画面でスポーツ中継などを観覧することである。長岡市でもオリンピックなどの時に開催されていた。新潟県には、アルビレックス新潟があるが、本拠地であるビッグスワンスタジアムは新潟市にあり、長岡市や小千谷市の高校生や大学生にとっては遠いので、中越地区でパブリックビューイングを開催できれば、より地域の関心も得られるのではないかと。これはアルビレックス新潟とのタイアップなどが必要となるため、現状では難しい話かもしれない。しかし、パブリックビューイングに興味を持った人が、スタジアムに足を運ぶようになれば、アルビレックス側にもメリットがあるのではないかと。小千谷側のメリットとしてはまず、人が集まってくるということだ。人がいなければ消費なども生まれない。小千谷だけではなく、長岡などの周辺市町村から人が集まれば地域で消費が生まれるのではないかと。今後は、オリンピックなども日本で開催されるため、スポーツ熱が上がっていきと予想される。その中で、テレビで応援をしたりするのもいいが、地域の人が集まって応援するのもいいのではないかと。スポーツの感動や、喜び、悲しみなども周りと共有することで新たな交流ができるのではないかと。



〈アオーレ長岡でのパブリックビューイング〉

※出典 <http://tamionet.com/blog/2014/02/publicview/>

3つ目はニュースポーツによる地域活性化だ。なぜニュースポーツをチョイスしたかということ、それは2点ある。1つ目は少ない予算で競技を運営できる点と、多くの年齢層の方が参加することができる点だ。これによって世代を超えた交流や、市民の健康促進などにも、つながるのではないかと。これは、空き店舗などで行うのは難しいことではあるが、空き地や体育館、公園などで開催することができるのではないかと。ここからは、気軽に取り入れることができそうなあまり知られていないマイナースポーツを紹介する。

まずは、スラックラインだ。スラックラインは低い綱渡りのようなものであり、高いところで綱渡りを行なうわけではないので、安全である。子どもだけではなく、大人でもなかなか難しいものとなっている。スラックラインのロープを木に巻きつけて使うことも可能だ。まきつけるところがない場合は、専用の台のようなものがあるため、平地でも設置できる仕組みになっている。これは、自然公園のようなところで行なうのがいいと考える。そのため、小千谷クラインガルテンなどに設置できるのではないかな。



〈スラックライン〉

※出典 http://od-vanvan.com/event/entry/_25/

次に取り上げるのは、トライフットボールである。トライフットボールは、フットサルの簡易版であり、1チーム3人からでコートサイズもフットサルの半分である。トライフットボールはスペースが小さくすむため、屋上や、プール施設の再利用などにも活用されている。フットサルの簡易版ということで、これもスラックライン同様に、子どもから大人まで楽しめるスポーツだ。さらに省スペースということで、空きスペースがあって設備を整えればすぐに始めることができる。人数的な面で見ても3人1チームということもあり、多くの人集めをする必要がなく少人数で楽しむことができるのだ。現在何もない空き地などを整備して遊べるようにするといったのもいいのではないかな。



〈トライフットボール〉

※出典 <http://www.jtfa.biz/info.html>

最後はパンポンである。このスポーツは聞いたことすらない人がほとんどだと思われる。パンポンは茨城県のご当地スポーツなのだ。道具は木の板で作られたラケットと、木製のネットと、軟式テニス用のボールを使って行なう。テニスや卓球などに近いスポーツである。なぜこのスポーツを取り上げたかという、パンポンの発展の仕方が面白いからである。もともとは、ある企業が発祥のスポーツであり、休憩時間中に体を動かそうということで、あった木材を使って始められたと言われている。今では大会が行われたり、体育の授業で取り入れられたりしているほどのご当地スポーツである。

今回、パンポンを取り上げた意味というのは、パンポンを行なったらいのではないかということではない。ご当地スポーツを考えたり、遊んだりすることも町おこしの1つになるのではないかと考えたからである。パンポンは、使う道具も少なく、誰でも簡単に始めやすい競技は始めやすいのだ。



〈茨城県のご当地スポーツであるパンポン〉

※出典 <http://www.pref.ibaraki.jp/>

ニュースポーツはこれだけではない。ドイツ発祥のインディアカやフランス発祥のペタンクなどもあり、ニュースポーツの規模は様々である。



〈インディアカ〉

※出典 <http://sports.geocities.jp>



〈ペタンク〉

※出典 <http://whaairecords.typepad.jp>

ニュースポーツはどれも気軽にでき、誰でも楽しめるスポーツとなっている。しかしこのようなスポーツはやる機会が極端に少ない。近年は体育館が主催してニュースポーツを行なう自治体もあるようだが、こういった競技を行なうことで、世代間の交流などが生まれるのではないかと感じた。地域活性化はどうしても、人がたくさん来ることや、経済的な面での発展に目が行きがちである。それはとても大事なことであり、考えていかなくてはならないことではあるが、世代間交流などで、地域内の人同士でつながりを深くすることも地域活性化なのではないかと感じた。ニュースポーツなどで多くの人に参加するようになり、つながりを持つきっかけになればいいのではないかと。

3.7 成果発表会

平成 26 年度の成果発表会が 12 月に、長岡市で開催され、小千谷活性化プロジェクトチームも発表した。25 年度同様にパワーポイントを使い説明した。今年度は、活性化案として、就学前児童施設の充実や、新規イベントの提案、ニュースポーツにおける地域活性化の提案などを行なった。

1日限りの雪まつり

小千谷の豊富な雪を利用する。
本町通りを封鎖し行うことで
インパクトを与える。
親子で楽しむことができる。

そり大会

本格的な雪合戦



〈上記のようなスライドで説明した〉

3.8 平成 26 年度の活動を振り返って

今年はこのプロジェクトが 2 年目ということで昨年よりは、一步踏み込んだ提案ができた。ゼミナール活動とは違い不定期での活動だったため時間が足りなく、中途半端になってしまった点、情報収集不足だった点が多かった。もともとメンバーの大部分が小千谷市についての知識が無いなか、2 年間小千谷市について活動して、多くのことや魅力を知ることができた。そのなかで今回提案したことを何か一つでも実施いただき、どのようなかたちであっても小千谷市の活性化につながればいいと考えている。多くの観光地やスポットが、小千谷市にはあるので、そういったものとリンクして活性化につながればいいと感じる。

最後に小千谷市活性化プロジェクトを依頼してくれた高野様、小千谷市について説明していただいたり、発表のアドバイスをしていただいた小千谷市役所の星野様、このプロジェクトを支えていただいた皆様に感謝申し上げます。

(以上)

平成26年度 学生による地域活性化プログラム
小千谷活性化プロジェクトチーム活動報告書

【発行日】 平成27年3月26日

【発行人】 内藤 敏樹

【発行】 長岡大学 地域活性化プログラム推進室

〒940-0828 新潟県長岡市御山町80-8

T E L 0258-39-1600 (代)

F A X 0258-39-9566

<http://www.nagaokauniv.ac.jp/>